

はじめに

東海道は元来、古代の行政区画である七道のひとつで、伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸の十五カ国を指した。しかし中世に入ると鎌倉幕府の成立により、このうち三河以东を幕府管轄下の「東国」とする新たな区分が生まれ、さらに室町時代になると、今度は伊豆・甲斐より東が鎌倉府（鎌倉公方）の管轄下となる。こうしていわゆる関東地方が古来の「東海道」から切り離された。一方、中世の京―鎌倉往還としての東海道は、近江から美濃を経由するようになり、伊勢・美濃から駿河・伊豆に至る、いわゆる東海地方が成立していく。

本論集では、このようにして成立した中世の東海道諸国に注目する。この地域は、古代以来の伝統的求心力を有する京都と、「東国」の中心地鎌倉との狭間にあつて、公家政権と武家政権、あるいは室町幕府と鎌倉府といった東西諸勢力のいわば「草刈り場」となつた。さらにこの地域には、古代以来多くの信仰を集めてきた伊勢神宮と富士山がその西と東に屹立し、それぞれが荘園公領制や戦国大名権力と絡んで、さらに複雑な様相を呈していたのである。

そこで本書では、主として東西の交通・流通に注目した第一巻『諸国往反の社会史』に続き、『領主層の共生と競合』と題し、東西の武家権力はもとより、戦国大名今川氏、さらには伊勢神宮や富士山周辺の宗教者たちをも含む諸領主層の共生と競合の有様に焦点を当てて一書にまとめた。全体構成としては大きく、主に宗教勢力について扱う第1部と、武家領主について扱う第2部に分けた。

まず第1部は「寺社勢力の盛衰」と題し、東海地方を代表する宗教権門である伊勢神宮や富士山信仰をはじめとす

る宗教者たちに関わる四本の論稿を配した。

岡野友彦「東海地方の伊勢神宮領」は、尾張・三河・遠江・駿河四カ国に分布した伊勢神宮領について検討したものの。その立地が伊勢湾・三河湾をはじめとする水上交通の利便性を意識していること。その得点は多く神宮神官層に伝領され、鎌倉時代、伊勢神道思想を大成した度会一族の経済基盤となったものもあること。室町時代になると、駿河の神領がいち早く失われ、逆に尾張と三河の神領は戦国時代に至るまで存続したことなどを指摘した。

溝口彰啓「中世石塔と東海の地域性」は、十三世紀～十五世紀中葉の東海各地域における五輪塔と宝篋印塔について、その形式分類と使用石材を検討したもの。当該地域の石塔は十三世紀後半頃の花崗岩製五輪塔をその端緒とすること。十四世紀前半、西大寺様式の律宗系五輪塔が西から伊勢・美濃、東から伊豆・駿河に波及すること。十四世紀中葉以降、東海各地に在地石材を用いた石塔が多く造立されていくことなどを指摘している。

小林郁「戦国期今川氏と御師亀田大夫」は、戦国期の東海道における伊勢信仰の一事例として、戦国大名今川氏を檀那とした伊勢御師亀田大夫について検討したもの。亀田氏が今川氏の有事に武器調達をも担う立場の御師であったこと。にもかかわらず十五世紀中頃における今川領内の檀所は、複数の異姓家御師によって担われており、十五世紀後半以降は橋村氏に担われるようになっていったことなどを指摘している。

近藤祐介「富士山興法寺と武家権力」は、中世～近世にかけて駿河国側の富士山登山道の一つ村山を管理していた興法寺について検討したもの。中世の興法寺は、顕・密・修験を兼修する衆徒と、修験を専修する山伏からなる山岳寺院であったこと。興法寺の中核である村山三坊は、それぞれ別々の人物に相承されており、とくに辻之坊は葛山助六郎という武家被官人によって相承されていたことなどが指摘されている。

次いで第2部は「武家領主の相剋」と題し、当該地域に対する鎌倉幕府・室町幕府・鎌倉府のかかわり方や、東海

地方を代表する戦国大名である今川氏の地域支配・交通政策に関する六本の論稿を配した。

廣田浩治「東海地方の荘園と鎌倉期の武家領」は、鎌倉期東海地方における荘園の特質を国ごとに考察したもの。各国とも王家領(院領)大規模荘園と、鎌倉幕府及び北条氏の所領の存在が大きいものの、特に駿河・遠江には王家領(院領)の比重が高いこと。一方、鎌倉幕府・北条氏の勢力拡大は駿河・伊豆に顕著で、遠江では西国荘園領主の支配権行使が認められることなどが指摘されている。

勅使河原拓也「鎌倉幕府の東国・西国支配と東海地域―境界地域の特性をさぐる―」は、鎌倉幕府の認識としての東国と西国の境目に焦点を当てたもの。最近紹介された丹波篠山市教育委員会蔵『貞永式目追加』の「国々守護事」を含め、鎌倉幕府の列島支配のあり方を示すいくつかの重要史料を検討し、そのなかで時に「東国」に含まれ、時に「西国」ともなる三河国の両属性など、東国と西国の境目としての東海地域について論じている。

木下聡「室町幕府の対東国政策―駿河国を中心に―」は、室町幕府が九州・関東・東北以外の守護や有力領主に在京を義務付けていたことに注目し、信濃・越後など境界地域の領主のあり方を検討した上で、駿河国との違いを論じたもの。境界地域の守護家は関東対策のためしばしば在国している中、駿河守護今川氏も同様であったこと。駿河の国人領主たちも応仁の乱頃まで対鎌倉府のため幕府から重視されていたことなどを指摘している。

杉山一弥「室町期大森氏の光芒と箱根山」は、室町期の大森氏に注目することで、鎌倉府との関係から駿河国を捉え直したものの。元来、箱根山西麓(駿河側)の国人であった大森氏が、上杉禪秀の乱に際して鎌倉公方足利持氏の命を救ったことで箱根山東麓(相模側)の所領をも獲得したこと。その後、箱根山麓は西方も含め鎌倉府方の「大森氏―箱根権現別当体制」によって掌握され、それが永享の乱・結城合戦まで存続することなどを述べている。

鈴木将典「戦国大名今川氏の富士上方支配と地域社会」は、駿河国富士上方(富士郡北部)に対する戦国大名今川氏の

支配と、地域社会の動向を論じたもの。戦国期の当該地域には、駿河国一宮大宮浅間社の大宮司を世襲した国衆富士氏の支配領域が形成されていたが、天文五年（一五三六）〜十四年の「河東一乱」を契機として今川氏の支配が強まったこと。その後も大宮司富士氏による支配領域は維持されたことなどが論ぜられている。

大石泰史「今川氏の伝馬と関所―交通政策に関する一試論―」は、国衆研究の視点から今川氏の交通政策を再検討したものの。今川氏の交通政策関係文書として著名な永禄元年（一五五八）の三河御油宿林氏宛今川義元判物を、弘治元年（一五五五）に始まる三州忿劇と関連付けて再評価し、御油宿八幡神社の神職で商人としても活動していた林氏が、もともと武家で、今川氏の三河侵攻に伴って今川氏に従った可能性を提示している。

以上、一〇本の論稿から本書は成る。本書「あとがき」にもある通り、本書の原型は富士市・富士宮市・静岡市を開催地として二〇一九年に開かれた第五七回中世史サマーセミナーにあり、残念ながら編者（岡野）はそこに参加していなかった。よってセミナー当日の「熱気」をどこまでお伝えできたかは心もとない。ただ「境界としての駿河」を「境界としての東海地域」に敷衍することで、より日本中世史全体の議論に裨益できる論集となったのではないかと自負している。奇しくも本年（二〇二四年）、吉川弘文館から「東海の中世史」全五冊が刊行され、編者（岡野）も含め、本論集二冊の執筆者の多くが、同シリーズにも寄稿している。

「いま、日本中世史は東海地方がアツい」

ぜひ本書を手掛かりとして、いま最もホットな東海地方の中世史をめぐる議論に触れていただければ幸いです。

二〇二四年七月末日

岡野友彦